

海外シンポジウム
「非西欧社会における近代化の再考：
日本(東アジア)とエジプト(アラブ)の場合Ⅲ」
開催報告

主催：国際日本文化研究センター・カイロ大学文学部&日本学研究所

共催：「国際日本研究」コンソーシアム

助成：国際交流基金

開催日：令和6(2024)年11月16日(土)・17日(日)

開催場所：カイロ大学文学部 旧館会議場 ※オンライン配信あり

参加者数：延べ711名(登壇者37名を含む)

【概要・成果】

18世紀以降、エジプト(アラブ)と日本(東アジア)は西洋列強の相次ぐ進出によってやむなくそれをモデルとした近代化を進めたが、両国(地域)の歴史や文化的背景、また列強諸国の干渉の手法などにより、そのプロセスにおいて一定の類似性を見せながらも、きわめて大きな相違も呈していた。このような両国(地域)の近代化の歩みを比較し、いわゆる非西欧社会において、それが如何に現地化し、またその目標とされた国民国家を構築する際に如何なる矛盾と衝突を抱えていたのか、本シンポジウムは両者のその多難に満ちた道程を再考し、あわせて今後の展望も検討しようという趣旨のもとで、二日間にわたって開催された。

開会にあたり、まず磯前順一教授(日文研)が「日本における戦後型近代の始まりと終わり：アメリカの占領と福島原発災害」をテーマとする基調講演を行い、戦後日本を「アメリカ型政教分離の国民国家」と指摘し、明治以降の「神権政治」「軍国主義」からは脱皮したが、天皇と国民一体の「国体」が依然として温存され、どこまでもアメリカの「冷戦軍事体制」下でその間接的な支配による「内地植民地状況」が続いていたと論じた。そしてその状況を明らかにし、国民に自覚させたのは、ほかならぬ3.11福島第一原発の爆発であるが、それをわれわれはどう受け止め、また人権を最優先に擁護する真の「近代」をどう構築すべきなのか、多くの現地調査事例を紹介しながら大会の討論課題として問題提起した。

セッション1「非西欧思想と西欧思想—矛盾か共存か」では、まずエジプトと日本はそれぞれアラブ地域と東アジア地域においてともに率先して近代化を進め、互いに多くの経験を共有してきたため、両者間の比較はきわめて重要であるが、ただ、それは「文明」(国家構造、都市化、産業化など)の側面では大いに参照となるのに対し、「文化」(思想、哲学、科学など)の側面では相違する問題が多く、より多元的に考察する必要があると提示された。一方、近代化が遅れたイラクでは、20世紀初頭に一部のエリート知識人が日本に強い関心を寄せており、それぞれの立場からその近代化経験を参考にしようとする事例が紹介され、また先に近代化を達成した日本をめぐって、その立場は「東」なのか、「西」なのか、そういった曖昧な「アイデンティティ」が両地域を比較する上で大変重要な視点だとの指摘もなされた。この他、前近代の時点から日本のいわゆる「西洋文化」受容において、実はすでに一部「アラブ」的な要素が含有していることが紹介され、三者間の複雑な文化関係はもっと留意されるべきだとの報告もあった。

セッション2「非西欧社会における近代化経験の事例」では、イスラエル、ロシア、モンゴル、日本が

取り上げられ、それぞれの思想、経済、生産様式、教育などについてアラブや日本と比較しながら考察された。イスラエルに関しては、その存在は「中東の西洋」と言われるほど西洋諸国の強い影響下にあり、西洋の諸制度を「摸倣」した要素が大きい、その成立には「過去」（伝統）が複雑に絡んでおり、イスラエルの近代を理解しようとする場合、より過去と現在の密接な関係を考慮する視点が必要だとの指摘がなされた。ロシアの場合は、日本と同様、近代化の波にさらされた際に大規模な社会改革を余儀なくされたが、急速な近代化の「悪影響」に対し、伝統的な価値観を守ることで独自の「近代」の道程を歩んできたが、類似性を持つ日本との比較により、両者それぞれの長所と短所を解明することができるのみならず、さらなる「自己発見」と新たな近代化モデルの模索も可能になるだろうと提示された。モンゴルについては、家畜動物の「放生」をめぐる、人間と動物の関係が社会制度の変化に伴って如何に変化し、またその変化に如何なる意識の近代化が図られていたかが報告された。日本に関しては、戦後の教育制度改革が成功例として紹介され、その経験が昨今の紛争中、また紛争後のアラブ地域の教育再建に如何なる参考となるのか、問題点も含めて検討された。

セッション3「日本における近代化の再検討」では、まず明治以降、「国民国家」の構築とともに「帝国」の構築も同時進行的に行われ、列強以外で唯一広大な植民地を保持する日本にとって、その経験が如何なる意味を持つのか、「満洲」におけるさまざまな「近代化」の実践を事例に考察された。次にメディアとしての日本のラジオ放送が取り上げられ、その戦前における植民地支配の道具としての占領側の側面と戦後におけるGHQ支配の道具としての被占領側の側面がともに日本の「近代」を創出した点が指摘され、ラジオを介したこの二重の近代化体験が今日もなお日本を規定し、またその間の連続性こそが日本近代の「歪み」を露呈させていると分析された。この他、戦後日本の経済復興をめぐる、それに寄与した政策や組織に関する研究が紹介され、それらのアラブ諸国における活用のメカニズムを検証する報告と、日本とアラブ諸国との関係発展において、故安倍晋三首相の果たした役割を考察する発表もなされた。

セッション4「日本・エジプト（アラブ）間の相互イメージ」では、まず明治時代においてイギリスの植民地統治学を学ぶ素材として刊行された『最近埃及』（1911）と、当時のエジプトにおける反植民地的ナショナリズム運動の勃興を詳細に報道する『朝日新聞』などのメディアの存在が紹介され、エジプトへのこうした相反する二つのイメージがどのように生成し、どのように補完しながら発展したのか、またそれが如何に日本自身の近代・反近代の様相を反映しているのかが分析された。次に近代思想史の観点から、戦後日本に導入された「QOL」（生命の質）の概念とその内容の変遷が辿られ、伝統的な価値観と現代的な価値観の融合が如何に「QOL」思想の展開に影響を与えたかが考察された。また日本の明治時代の婦人雑誌『青鞥』と同時代のエジプトの婦人雑誌『エル・マスリア』が取り上げられ、両誌のさまざまな女性権利をめぐる言説の比較を通して、日本とエジプトにおける女性解放運動の共通点と相違点についてフェミニズムの視点から分析された。さらに近年、日本におけるムスリム人口の増加に伴い、その価値観に根差した国際的なムスリムの育成を目的とする国際イスラム学校が東京などで多数誕生し、その教育現場の状況と目下直面している課題を紹介する報告もなされた。

セッション5「日本文学・言語研究」では、まず時代を遡って、「シンデレラ」物語のエジプト起源説から説き始め、その他の非欧州起源説の再考を促した南方熊楠の「ロンドン抜書」で触れた書記文字の方向性を確認した上で、エジプトで行われた右から左へ、その往来の牛耕式、さらに下から上へという全方向に広がっていく書記方法が示した文字読解の多様性論を提示し、そうした書記方向の問題が如何に絵

画の時間進行・表現性と連動し、国際的な視野で日本文化研究に新たなパースペクティブを提供することができるかが考察された。次に日本人作家・石牟礼道子とアラブ人作家アブドゥル・ラフマン・ムニフが取り上げられ、同じ環境問題をテーマとする両者それぞれの代表作『苦海浄土』と『塩の都市』の比較研究を通じて、日本文学とアラビア文学の「有意義な交流」を実現し、いわゆる「翻訳」を超えた世界文学の可能性が提案された。また文学作品における日本語からアラビア語への翻訳上の問題として、小林多喜二の『蟹工船』を具体例に食文化や宗教的慣習の違いにより、如何にその作品の中の「比喩」表現を現地化させるべきか、その生成の原因と解決方法が報告された。この他、日本語表示の文字として漢字、仮名、ラテン文字があるが、それぞれの特異性により、日本語の音型が見え難いのみならず、言語構造そのものも覆い隠されているため、いささか曖昧な媒体となっており、一種の仮装性を持つ「現実」下にあると指摘された。またコーランの日本語訳における翻訳ストラテジーとして三つのコーラン日本語訳のテキストを素材に、そこで展開された宗教用語の翻訳実践が紹介され、語彙の概念や意味の等価と伝達の可能性が探られた。

セッション6「若手研究者 日本研究」は、エジプト各大学の若手研究者の育成を目的に設けられた。ここでは、シンポジウムのメインテーマから離れて「アラブ現代詩に於ける広島イメージ：マフムード・ダルウィーシュの詩を中心に」、「『百人一首』と『三十六人撰』の共通歌～恋歌を中心に～」、「異文化接触における留学生の若者ことば使用の対照比較」、「アラブの目からみた日本の近代化体験：ラオーフ・アッバスとマソード・ダーヘルを中心に」、「エジプトのビジネス文化を理解するー日本のビジネスモデルを中心に」などの研究発表が行われ、文学を中心にさまざまな日本・アラブ間に関する考察が提示された。

そして、最後のパネルディスカッション「日本語普及・日本研究：過去・現在・未来」では、井上章一 所長（日文研）による現在進行中の「国際日本研究」コンソーシアム事業の紹介に続き、Ali Abdulameer SAJIT 教授（Baghdad University）、Habib AL BADAWI 教授（Lebanon University）、Adel Amin SALEH 教授（Cairo University）の三人により、それぞれバクダット大学における日本語と日本研究の現状、レバノンにおける日本語教育・日本研究の現状、エジプトにおける日本研究のこれまでの変遷と現在の動向、この間のカイロ大学によるアラブ地域の日本研究への貢献、また当地域における今後の日本研究推進へのロードマップなどが語られ、二日間にわたるシンポジウムが幕を閉じた。

このように、本シンポジウムは、日本とエジプト、またそれ以外の東アジアとアラブ世界を含めて、双方の近代化をめぐる多種多様な問題について議論し、両地域間の比較を通して、これまでにほとんど研究の俎上に載せられなかった数多くの学術的課題を「発見」することができたのみならず、それらをさらに探求する両地域間の研究者による共同研究の可能性も模索されたことで、大変大きな成果を得たと評価できると思われる。

文責：劉建輝（日文研教授）